vol.301

January 31st 2020

スタジオの足音

 p.2
 大学院スタジオ開講p.2-3

 p.2-3
 大学院スタジオを語る

 <本郷特集>

 p.4-9
 大学院スタジオを語る

 各テーマの提案内容p.10
 一文字に込める新年の抱負

今治市より瀬戸内海を望む

vol.301 スタジオの足音 TEXT\_SUZUKI/M1

# 大学院スタジオ『東京の既成市街地のリ・デザイン』開講

大学院スタジオは、様々な都市課題を解決し、新たな都市像の提案を行うグループワークの演習である。Sセメスターに開講された「復興デザインスタジオ」は江東区を対象とした COVID-19 や震災等の災害に対する事前復興の提案が求められた。それに対して、Aセメスターに開講された本スタジオは、『Re-designing Tokyo's Urban Fabric 東京の既成市街地のリ・デザイン』がメインテーマである。その上で、3つの対象地「本郷」「品川」「東池袋」が用意される。異なる研究室、異なる専攻の学生、留学生が対象地ごとにグループとなり、2020 年 12 月 23 日に最終発表を終えた。

本郷 歴史的資産の残る街並みとプレイスのデザイン
- 歴史文化資源の保全と活用を視点に

品川東地区のゼロ・カーボンシティのデザイン
- 都市システムデザイン手法を東京の新しい玄関口に適用する

東池袋 都市空間の自然環境基盤を可視化する

- 持続可能なアーバンランドスケープのデザイン表現

# 大学院スタジオを語る <本郷特集>

スタジオだけでなく、私も参加している研究室のプロジェクト「本郷のキオクの未来」(以下本郷 PJ)としても関わりがある「本郷」に着目した。本郷のスタジオとプロジェクトのいずれにも参加するお二人を招いて、スタジオでの成果やプロジェクトへの接続に関してディスカッションを行った。

参加者 | 今本健太郎(都市計画研究室 M1、以下今本) 官尋(まちづくり研究室 M1、以下官) 聞き手 | 鈴木直輝(都市デザイン研究室 M1、以下鈴木)

# セクション1 COVID-19 でのグループワークのあり方

鈴木 | 今回のスタジオは、COVID-19 の影響もあって、オンラインでのグループワークが中心だったと思うのですが、課題をどのように捉えていますか?

今本 | 街歩きやスタディのために対面での作業も時々行い、他方では miro や google docs などのツールも活用したりと、対面とオンラインのハイブリッドで進めていた。課題は意外となかったかも。対面でも起こりうることだが、全員が黙ってしまう場面が発生したり、話し合いがダラダラ伸びがちだったかもしれない。あと、無駄な話が発生しにくかった気がするから、アイディアも生まれにくかったかも?

鈴木 | 対面とオンラインでのグループワークの可能性や、これからのあり方はどう考えていますか?

今本 | オンラインでのミーティングはどこからでも出席できるので良かった。料理中にも離脱せずに話の流れを追うことができたし(笑)感染リスクが落ち着いても zoom ミーティングはある程度続けて欲しい。慣れていけば結構パフォーマンスを発揮できることになりそう。ツールを駆使してオンラインでのミーティングを行いつつ、みんなが対面を望むときだけ対面でやる形でも良さそう。

# オンラインミーティングと対面でのミーティング ハイブリッドでそれぞれの良さを活かす

鈴木 | 海外に居ながらスタジオに参加していた留学生がいたとも聞きました。オンラインだからこそ成せることですね。課題のところで、無駄な話からのアイディア出しが難しいと話していて、私もオンラインのディスカッションで実感するところです。現状あるツールを駆使したとしても対面でないと難しいものなのでしょうか。

# オンラインミーティングを行うにあたって、 議論する環境の設定や議題の整理、雰囲気作りが重要

今本 | 世間話とかで脱線しながらも偶にアイデアのタネを見つけて本論に少し活かす、という状況を想定していた。オンラインミーティングだと、会議終了と同時に切ってしまい、その後に続かない。もしくは、時間的制約が少ないこともあり、だらだら議論が続いてしまう。そうすると、対面のような今からは脱線してもオッケーみたいなラインがなく、終盤には疲れてしまい世間話をしようというモチベーションがなくなってしまう。だからこそ、無駄な話をする機会を設けようと思ったら、ミーティングの時間を厳格に決めてダレる前に終わることがある程度有効だったりするんじゃないかな?



官 | ちゃんとした話し合いと、軽いおしゃべりの線引きは確かに難しかったよね (笑) 特にスタジオの場合は、ここまでできていればいいという明確なラインがなくて、できるところまで詰める、というのがあったので、今日の目標達成!という感じで終わることもなかなか難しい感じはした (笑) 時間を設けてしまうのは確かにいいよね、その時間以降はおしゃべりという感じにするといいのかな? あとはグループの中でもペアに分かれて作業とかあって、その時は割とスタジオ以外の相談とかもちょこちょこ挟んだりしてました。

鈴木 │ ペアに分かれての作業は確かに効果的だよね。人数が多いとどうしても参加しきれいない人が出てきたり、一部の人だけが話を進めたりみたいな形になりがち。少人数に分かれると「無駄話」もできて、そういう環境を作ることはこれからも大事そうだね。

今本 | 官さんと鈴木くんが言う様に、ペアごとに分けたのはよかったかなと思います。保坂くん(品川のグループ)あたりに聞いてると、班全体を比較的良くわかってる一人の人に情報やら作業やらが集中しちゃっていろいろとパンクしたり進みが遅くなったりしたそうなので。その辺の役割を明確に分担しちゃうのはこういう場面では結構有用だなと思いました。と言いつつ、官さんたちに進行とか大分任しちゃってたけど。ありがとう。

### セクション 2 今回のスタジオでの成果

# COVID-19 の背景の下で、短期アクションに焦点を

鈴木 │ 本郷のスタジオを経験しての感想、できたことや新たに見えてきたことを教えてください。

官 | 短期アクションに焦点を当てていたので、具体的な施策に落とし込む必要があって、そこが難しかった点でもありますが、その反面、地域の課題を ぼんやりと捉えるのではなくて、根拠をしっかりと持って向き合える良い機会になったと感じています。

それからまだまだ足りていないと思いますが、本郷の歴史や魅力について 改めて学ぶことができたのもよかったと感じています。

今本 | 分析のための時間が割と少なめだったので、都市工の演習にありがちな、全体的な現状把握→課題発見→解決に向けての提案、という直線状の進み方がしづらかったかな、という印象がありました。トップダウン的に議論を組み立てるには十分な現状把握が必要だと認識しました。 こういう時間がなく、それぞれの前提知識が異なる状況では包括性を諦めてでもボトムアップ的で具体的な話から組み立てていくのが重要だと感じました。

もちろん、スタジオを通して本郷に詳しくなれたのはとても良かったです。

個人的には通学先だけでなく居住地でもあるので、また一つ地域に対しての 親しみが湧きました。

#### これまでの分析・調査の蓄積を課題の把握に活用する

鈴木 │ 4 年連続でスタジオの対象地になっていますよね?過去の提案は参考にしたり利用したりしたのですか?

官 | 先ほど今本くんも述べていましたが、今年は現状分析の時間が少なく、また、現地調査が厳しいメンバーもいたりして、現地の課題の把握は、過去の資料をだいぶ参考にさせてもらっていました。一方、提案内容は、過去を参考にしつつ、今までの提案と違った観点がいいよね、というのをメンバー全体で意識していたと思います。

鈴木 │ 過去の調査が生きてくるというのは大事な点ですよね。提案の方は意識して異なる視点を入れたとのことですが、具体的にどういった点を意識したのですか?

# " Reconnection within Community " 提案に新たな視点を吹き込む

官 | そうですね、ご提示いただいたところは、実際に過去年度とは状況が変わった点という意味で、過去とは異なる点ですね。それに加えて、全体のコンセプトを考える際にも意識しました。「Reconnection within Community」というのがコンセプトですが、これは、今までは「大学一住民」といったような構図が根底にあり、その間をつなげる、という形の提案が多かったように認識(解釈)していますが、私たちの議論の中では、「大学一住民」のような二項対立型ではなくて、大学関連者もコミュニティの中の一員として、また、住民の中のコミュニティにも種類があるので、それらの間の壁を全部ひっくるめて、乗り越えて、一つのコミュニティとしてつながりを取り戻そう、という意味を込めて、このコンセプトにしています。言い回しの問題じゃないかと言われるかもしれませんが、この点の意識は過去年度とは異なるのかなと考えています。

鈴木 | コンセプトの「Reconnection within Community」には、そうした想いが込められていたのですね。

お二人はどういった提案の箇所に携わったのですか?やりきれたところ、 やりきれなかったと感じているところを教えてください。

# 地域の文脈を読み解き、建物から建物が面する道まで発想を広げる

官|私は SiteB のまんさだ(万定フルーツパーラー)と宮前通りを担当していました。

やり切れたところは、敷地境界にとらわれずに、その地点の問題に関連ありそうなところまで対象を広げて提案を行うことができたところですかね……?元々はまんさださんの二つの隣り合う建物だけを対象にしていたんですけど、地域の文脈から考えて、宮前通りそのものの改善もすごく重要であるということになって、そこも含めて考案することになったので、単なるスタジオの提案を超えて、より地域の実情に合わせることができたのかなと思っています。

やりきれなかった部分としては、地域の住民の方との意見交換をしっかりできていないこと、宮前通りの交通の現状や提案による交通量・ルートへの





▲宮前通りに面する「まんさだ」さんの2つの建物

影響の考慮がまだ不十分だと感じているので、その点はスタジオ内ではやり きれなかった部分だと思っています。

鈴木 │ 昨年度までの提案では敷地ベース、もしくは隣り合う敷地の提案というのが多かったイメージだったのですが、地域の文脈や交通の面から考えて宮前通りまで発想を広げたプロセスはとても面白いですね。

### 目標を相互に関連付け、包括的な提案に結びつける

今本 | SiteA の「Cafe BONNA」敷地を担当していました。

やり切れたところは、土地の文脈を活かす、ファサードを維持する、実現可能なビジネスモデルを提案する、具体的な空間像を描く…と言った、敷地に取り掛かる前から存在していたトップダウン的な目標を、最低限相互に関連させながら包括的な提案に反映させた箇所です。"ここでしかできないこと"と"他でも真似できること"の両側面を求められた今回の提案では上記の各項目とも大分苦心したので、一つの形に仕上がって良かったです。

逆に、上記の広い要望に答えようとして、今一つ少し深みを出せなかったなというのがやり切れなかった部分です。特に、隣接しているまるそさん、泰雲堂さんにヒアリングした上で、両者の見取り図を元に現実的なアクションプランを描くと言ったところまで踏み込めなかったのが心残りですね。

鈴木 │ 複雑な背景、目標があったのですね(笑)それらを丁寧に紐解きながら、短期から長期に至る空間提案、利用方法やマネジメントを一体的に提案できたのは非常に大きいですね。

#### セクション3 スタジオからプロジェクトへの展望

鈴木 | やりきれていないこととして、「地域住民の方との意見交換をしっかりできていないこと」を挙げていましたね。

# スタジオの成果をベースに地域住民との意見交換から始めて、 効果的な短期アクションをプロジェクトに実装する

官 | COVID-19 の影響で、地域住民の方へのヒアリングはきちんとすることができませんでした。今後の課題であり、それこそ本郷 PJ への展望の第一歩なのかなとか思っています。

鈴木 | 本郷は実際にプロジェクトがあって、そこを繋げていけるところが面白いですよね。プロジェクトに繋げていくには、まず今回の成果をベースに地域住民と意見交換を行い、短期アクションを実践していく流れなのでしょうか。

今本 | やっぱりそこから始まると思います。加えて、今回の提案ではあまり本郷 PJ のこれまでとこれからの活動との繋がりを深く考えてはなかったので、本郷 PJ の活動とうまく結びつけて短期アクションをより効果的なものに出来ればより良いと考えています。

官 | 本郷 PJ のメンバーの方からまずコメントいただいて、その次に、住民 の方とも意見交換して、本郷 PJ の方の力もお借りして短期アクションに繋 げられたら嬉しいと思っています。

鈴木|ぜひ本郷 PJ に活かせるよう動きはじめましょう!今回は参加していただいてありがとうございました!

官 | こちらこそありがとうございました!

今本 | 官さんも鈴木くんもお疲れさまでした。ありがとうございました!

# 各テーマの提案概要

次ページより、大学院スタジオの提案概要をテーマごとにまとめている。 講評をして下さいました先生方、寄稿して下さった各テーマの参加者の方々、 ありがとうございました。



# **Reconnection within Communities**

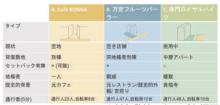
# 地域内での物理的、歴史的、社会的 なつながりを取り戻す

現状の課題として空き家の増加、歴史的資源の減少やCOVID-19の影響による昼間人口の減少があり、商店は打撃を受けている。加えて将来的に都市計画道路の指定による高さ制限が解除された際の影響も考慮し、ヒューマンスケールの街路空間を維持するためのアクションを短期・長期に分けて提案する。



▲コンセプトとアクションの時間軸

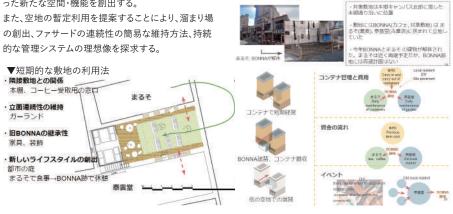
敷地条件から本郷通り沿いの建物を3タイプに分けてケーススタディとしてそれぞれのタイプから一敷地ずつを選んで具体的なアクションを提案する。



▲対象敷地のタイプと概要

# A. BONNA

BONNAは1951年開業のカフェで、まるそ(蕎麦屋)、泰雲堂(古書店)に挟まれて立地していた。本提案は、隣接店舗との関係性の構築に着目し、複数敷地が一体となった新たな空間・機能を創出する。



▼敷地

# ●時間軸 Now BONNA, まるで連続が解体 Long-term FOSE Lo

# B. 万定フルーツパーラーと宮前通り

対象敷地は、本郷通りと宮前通りの2本の通りに面する現在シャッターが降りている(元)万定果物店の建物と、隣接する休業中の万定フルーツパーラー及び宮前通りである。ここは本郷通りと奥の住宅街に繋がる通りの両方に面することが特徴であり、特に宮前通りは、かつて存在していた映世神社の参道として、商店で賑わっていたという歴史的な意味を持つ。かつて多くの人で賑わっていた宮前通りも、現在では、地域の中でも特に交通量が多く歩きづらい空間と化している。

現状分析から、万定フルーツパーラーをはじめ、歴史的ファサードを持つ建物が残っていること、沿道の一階部分は飲食店やオフィス等の商業用途が多いことが分かった。また、宮前通りの交通量の多くは地域内に用事がある自動車ではなく、西片エリアと本郷通り間の連絡路として使用する通過交通であることが明らかになった。

このような敷地の現状に対し、私たちは、段階的に 宮前通りを歩行者空間化し、沿道の商店街の賑わい を通りに広げること、また、万定の2つの建物を地域の交流の拠点として整備することを最終の施策ゴールとし、その実現に向け短・中・長期のアクションプランを立案した。

### 短期アクション



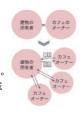
(元)万定果物店の1階を 開放し、万定フルーツパーラーの飲食スペースと する。また、植栽とスト リートファニチャーを配 置し、昼食時のみ宮前通



りを歩行者空間化し、飲食可能スペースとする。

# 中・長期アクション

宮前通りの歩行者空間化を恒常 化させる。また、万定フルーツ パーラーを徐々に複数オーナー によるシェアキッチンの形態に 移行し、地域交流の拠点とする。 (元)万定果物店の2-3階も地域 のまちづくり拠点となるよう、 地域のアクターが連携する拠点



として整備する。また、沿道のコインパーキング も移動式店舗が入ることができる空間として整備 し、通り全体が賑わう空間の創出を目指す。



# C. 赤門ロイヤルハイツ



▲対象地周辺現況

短期的には、比較的規模の大きなセットバックスペ ースを活用することで、本郷通りのヒューマンスケ ールな景観をつなぐと同時に、そこでのアクティビ ティが住民同士や落第横丁の店との関係をつなぐ

長期的には、都市計画道路の 指定解除後の建て替え時に、 元来本郷通りから喜福寺に伸 びる参道によって担保されて いた、空間的つながりを取り 戻す。



▲対象地

#### 短期アクション

現状駐輪場となっているセットバックスペースで、 自転車モジュールの可動ファニチャーを設置する。 住民自らファニチャーを作るWSや、落第横丁の店 とコラボしたイベント等を開催し、人々の関係を繋 いでいく。ファニチャーは可動なので、時と場合に

応じてレイアウトを 変化させる事で空間 の様々な使い方が可 能になる。

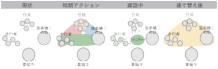
▲ファニチャーの例





#### 長期アクション

建て替え時に人々と場所のつながりが途絶えないよ う、建設中も一部でアクティビティを継続し、ロイ ヤルハイツと落第横丁との関係をさらに強化する。 また、旧参道空間に中庭を配置する事で喜福寺と本 郷通りを空間的に繋ぎ、場所の歴史性を取り戻す。



▲つながりの変化のイメージ クの待合所としても使われ やものづくりをできるDIYス る癒しの空間。 ストックする可動ボックスも設置。

▲セットバックスペース活用平面図(イベント時の例)

# アクションプラン

#### 限られた人的資源の中で 連続的なアクションを実施

限られた人的資源を勘案しつつ、3敷地それぞれの 提案を実現化するため、より緊急性の高いアクショ ンから順次実行に移す。2021年から始まり、2030 年以降までの長きに渡り、継続的にそれぞれのフェ ーズにあったアクションが行われる。

# まとめ

### 提案により実現される本郷通り像

これら3つの個別敷地の提案によって、その敷地 における直接的な影響だけでなく、性質の近しい 他の敷地において類似の取り組みを誘発すること で更なる波及効果も期待される。

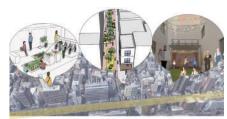
物理的/歴史的/社会的の3側面からのアプローチ を通して、コミュニティ内での様々な主体同士が 再び紐帯を取り戻した本郷通りが実現される。

#### 2021 2022 2023... 2030... DIY コンテナの設置 新 BONNA の建築 新まるその建築 宮前涌りのプラザ化 宮前涌りの経常的な閉鎖 В 1Fの食事スペース化 & 試験的なシェアキッチン利用 1Fスペースの開放 UDC& シェアキッチンとしての利用開始 赤門ロイヤルハイツ 建て替え C ファニチャーの設置 イベント & ワークショップの開催

▲各アクションの想定時期



▲3つの側面から成し遂げられる"Reconnection"



▲本郷通り各所で提案が実現化

# Historical Heritage and Community of Hongo, and their Continuity

都市デザイン研究室 YESHI SAMDRUP

The studio work on place design with historical heritage was a wonderful experience. Although I faced limitation due to not being able to visit the site and to gather data, the other members were helpful in informing me through virtual means. Historical heritage is always an opportunity in urban scenario and are used as source of regeneration of the area, which has dwindled its significance over the time. The case in Hongo was similar to the many of the places where the heritage resources were losing importance and weak local community vitality, specifically with local people and students of Utokyo. The condition has exacerbated by COVID-19. Through the studio work, we were able to understand the site context and propose three different model cases, aimed to reconnect communities while revitalizing Hongo area. Due to limitation of the time and the COVID-19, certain aspects were not satisfactorily covered, for examples, listening to the opinions of the people from the community and exhaustive collection of data for traffic. However, with the support and guidance from the Professors and Sammonii san (source of information regarding the Hongo area), we were able to propose concrete actions.

# まちのプロジェクトにしていくための今後の課題

講評 都市デザイン研究室 中島直人准教授

今年度はコロナ禍に向き合い、今、できること、ショートタームのビジ ョンに集中した。サイトAでの隣接店舗による挟みこみで土地利用再生を 段階的にデザインしていく発想は秀逸であった。しかし具体の空間デザ インについては、本棚やベンチ、ガーランドなどの要素がばらばらと空 き地に置かれた感がぬぐえない。足元の土地、3つの壁面、空を一体とし て捉えた「新しい空間」を提案していこう。サイトBは宮前通りに着目し 、空き店舗活用を本郷の交通問題に結びつけた構想力を評価したい。た だそのことで、この提案を動かす(投げかける)主体は見えづらくなってし まった。UDCへのプロセスデザインとして、主体の検討を深めよう。サ イトCは、よくよく敷地の特徴をつかみ、自転車ファニチャーをはじめ、 丁寧なデザインを展開した。だからこそ、マンションのオーナーに向け て、改修事業として提案を説明するプラクティカルな側面の探求がさら に必要であろう。空地のリノベとマンション住戸のリノベとを連動させ て提案するなどの枠組みもあるだろうか。ということで、それぞれの「今 後の課題」を私なりに考えてみたりするわけだが、そもそも一度も対面で 議論する機会が持てない中でのこの成果、履修者の頑張りに最大の敬意 を表したい。次はこれらを実際のまちのプロジェクトにしていこう。

vol.301 スタジオの足音 TEXT\_SUZUKI/M1



# 分析・計画・評価を一体的に扱った都市システムのデザイン手法

# 提案のフレームワーク

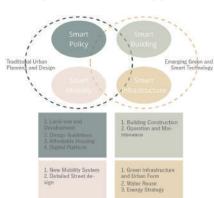
ゼロカーボンシティとは、圏内の二酸化炭素排出量が吸収量と同等な状態にある都市を指す。日本では2050年までに国全体としてのゼロカーボン(カーボンニュートラルとも呼ばれる)が目指されており、品川は先進都市としてより早期な構想と実現が求められている。

ゼロカーボンシティはスマートシティ政策の一環であり、単に二酸化炭素排出量のみを削減すれば良いわけではない。そこで既往論文を基にフレームワークを作成し、レジリエンスや社会的公正を同時に考慮することを決めた(図1)。

さらに本スタジオでは、都市空間を形作る4つの要素;政策・インフラ・モビリティ・建物毎に取り入れるシステムや技術を提案し(図2)、マスタープランにてそれらを統合、最後に5つの敷地と1つの都市軸へケーススタディを適用することで、都市システムデザインの運用を試みた。

# Environment smart smart building green energy green space land use Carban climate change natural disasters Resilience social instability epidemic (covid-19) Society

▲図1. ゼロカーボンシティの位置づけ



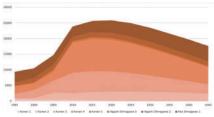
▲図2. 都市空間を形作る4要素

# 敷地分析

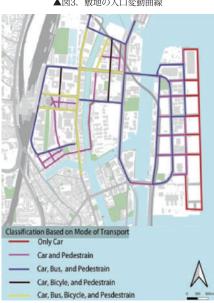
品川は古くからの宿場町であり、国内最初の鉄道駅が整備された土地でもある。敷地では2003年に東海道新幹線が開通したことで急激に人口が増加し(図3)、埋立地まで開発の波が広がった。近年も新駅の開業が予定されており、鉄道拠点としての発展は今後も進んでいくことが予想される。

一方で道路網は、断続的な交通の集合体であることが読み取れる(図4)。現地調査では、駅から埋立地までを結ぶ都市軸が自動車中心であること、運河沿いに十分な歩行者空間が整備されていないことが、特に不便さをもたらしていると考えた。

今後敷地内の人口が減少していく中で、歩行者空間の未整備は地域全体の衰退につながり得る。土地毎の再開発に加えて、それらを繋ぐ新たな交通網の整備を提案することで、ゼロカーボン、災害に対するレジリエンス、そしてアクセシビリティの公正さが向上するだろう。



▲図3. 敷地の人口変動曲線



▲図4. 交通手段による道路分類

# シミュレーション

敷地分析を踏まえて5つの敷地を選定し(図5)、環境シミュレーションを通して各敷地に最適な開発ストラテジーを適用した。(シミュレーションは国立環境研究所の吉田崇紘氏による。)選定した敷地は以下の通りである; A:食肉市場エリア、B:海洋大学エリア、C:倉庫・工場エリア、D:水再生センターエリア、E:遊休地エリア。シミュレーションでは敷地毎に3つのストラテジー; ①高層化促進、②緑化促進、③職住混合促進を設定し、それぞれのエネルギー効率をレーダーチャートで可視化した(図6)。

結果、以下のストラテジーを採用した(図7)。

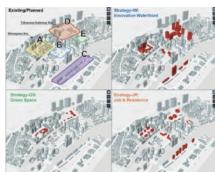
敷地A: 職住混合促進

敷地B: 職住混合/緑化促進

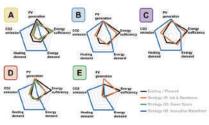
敷地C: 高層化/職住混合促進

敷地D: 高層化促進

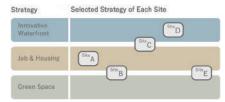
敷地E: 職住混合/緑化促進



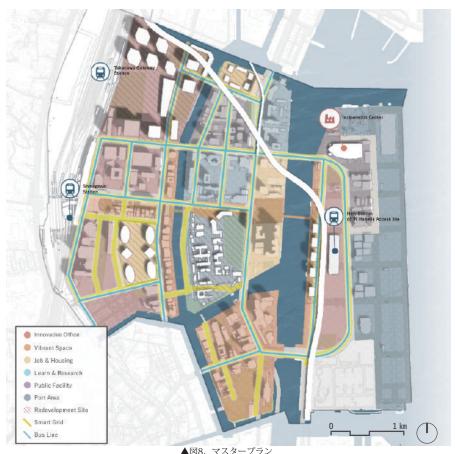
▲図5. 5つの選定敷地と3つのストラテジー



▲図6. エネルギー効率のシミュレーション結果



▲図7. 採用したストラテジー



#### 提案概要

図8は、全体の土地利用を統合したマスタープラン である。品川駅周辺に集中していた高層オフィス ビル群を、高輪ゲートウェイ駅周辺(図9, SiteD) や新たに開業予定のJR羽田空港アクセス線の新駅 周辺(図9, SiteC)に配分することで、過度な高層 化を避けつつ開発ポテンシャルを受け止めた。品 川駅から新駅を結ぶ都市軸にはグリーンコリドー (図9, Site)をつくり、歩行者や小さな交通の快 適な移動を可能にする。また遊休地(図9, SiteE) や老朽化した食肉市場(図9, SiteA)の跡地には豊 かな緑地と共にアフォーダブルな住宅を供給し、 既存バスによって駅からの容易なアクセスを可能 にした。開発には新たな建設システムが活用され 、それらはスマートグリッドを用いた効果的なエ ネルギー配分によって、全体としてのゼロカーボ ンシティを達成する。

#### 課題と展望

本スタジオでは敷地分析と環境シミュレーションを基にマスタープランを作成し、主要な敷地のケーススタディを介してシステムの適用を試みた。しかし、敷地分析から開発ポテンシャルを正確に見極められていない点、シミュレーションに縁地等インフラの環境効果を反映できていない点、計画(特に社会的公正や経済性)の評価指標が定まっていないといった点に未だ課題を有している。持続可能な都市には分析・計画・評価が一体となった、より一層解像度の高い「都市システムデザイン」の運用が求められている。



# 包括的な提案

都市計画研究室 保坂朋輝

背景知識の多様な多国籍メンバー、さらには国内外の研究者との協働の中で、互いの理解や思考の共有に難しさを感じながらも、ゼロカーボンに求められる広範で包括的な提案を意識した。その反面、提案間の連携・整合性を取ることや、詳細なデザインに落とし込む段階に十分に踏み込めなかった点が心残りであるが、最終的にメンバーの得意分野を最大限活かした提案ができたと満足している。

# Coordinate to Reach A Broad Consensus

都市デザイン研究室 Jinyu CHEN

The cooperation between the members from different cultures and professions was the biggest challenge except building up a new concept framework of Smart City while focusing on Carbon Neutrality. However, what we found is that this challenge can also be a big opportunity. It could actually reflect the uncertainties we have to face in an international project because of the different concerns centred on smart city and urban design. And I think we' ve struggled to make the outcome with diversity in order. Even though several issues left to be solved, I still feel I learned a lot from teachers and each member of the studio.

# 学際的・国際的チームによるオンライン・コラボ

講評 都市計画研究室 村山顕人准教授

昨年度と同様、品川駅東側の臨海部を対象に、太陽光発電量、エネルギ ー需要、エネルギー効率、暖房需要、二酸化炭素排出量を推定できる都 市システムデザイン手法を用いた計画・デザインに取り組んだ。「スマ ートシティの文脈の中でゼロ・カーボンの街をデザインせよ」との課題 に対して、学生たちは、「スマートシティ」を「スマート技術を活用し て環境・社会の目標を達成する手法」と定義し、ゼロ・カーボンに加え レジリエンスおよび社会的公正の達成をも目標として掲げた。スマー ト政策、スマート・インフラストラクチュア、スマート・モビリティ、 スマート・ビルディングで構成されるビジョン及びマスタープランを描 き、5つの再開発地区について複数の代替案を作成、それらの環境シミ ュレーション結果を踏まえて最終案を検討している。従来のGISやCAD のソフトウェアに加え、Zoom、Slack、Miroといったオンライン・ツ ールを駆使した、来日できなかった中国やインドに在住する留学生も含 めた建築、都市デザイン、都市計画、緑地計画、環境工学等を専門とす る9名で構成される学際的・国際的チームのコラボレーションは、各自 の積極的な取り組みにより、予想以上にダイナミックであり、それが素 晴らしい成果物の生成につながった。



Nurturing Urban Basin 都市流域という自然を介した一つのつながりの中で醸成されるコミュニティとライフスタイルの提案

# ポストコロナ時代の戦略

①公と私の境界があい まいになりシェア領域 を拡大していく/その ための制度が必要に。

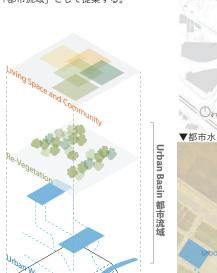


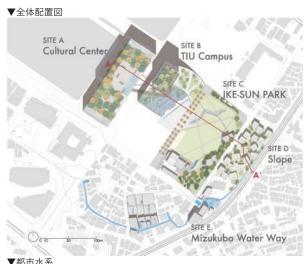
③都市自然と都市住民 の間に新しい関係性が 形成される。



# コンセプト:都市流域 Urban Basin

台地と低地のまとまりのなかに都市化によって生まれた高層建築物群〜公園〜密集市街地を新しい地形として最解釈する。雨水と地下水を利用した都市水系と再自然化のための基盤を整備し、そのシステムを各敷地でのライフスタイルやコミュニティをつなぎ合わせる「都市流域」として提案する。

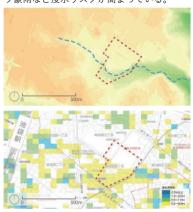






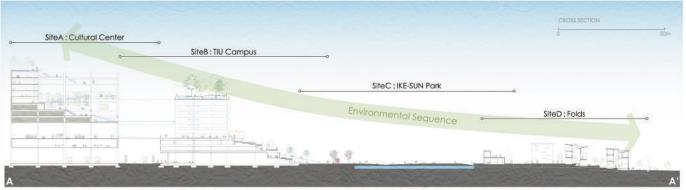
# 都市型水害のリスク

対象敷地である東池袋は水窪川によって形成された台地の"へり"に位置し、近年のゲリラ豪雨など浸水リスクが高まっている。



# 

高層化したエリアから公園を介して低地部の住宅地・水窪水路へと流域が形成され断面的に環境性能が連続する。



# SITE A:「山」化する文化会館

空洞化が進む文化会館を減築し、土壌と樹木を挿入することで雨水を 涵養する「山」としてコンバージョンを行う。「山」は都市の中で緑 あふれる空間となり、東側の大学や公園を見渡す視点場となる。



# SITE C: 都市流域のハブ「イケサンパーク」

現在の防災公園「イケサンパーク」のコンバージョン。地下貯留槽を 設け、上流の SITE A、B からの水を受け止めることで防災公園として の機能性を高め、水と触れ合うことのできる心地よい場をつくる。



# SITE E-1 : 水窪水路とともに暮らす家

暗渠化した水窪川の上に、周辺ビル群や地下鉄からの未利用地下水 を流す水路を提案する。水路に顔を向けた家では水の流れとともに ある豊かな暮らしが営まれる。



# スタジオの醍醐味

都市情報・安全システム研究室 竹中大貴

視野がかなり広がったと思う。そもそも、アンバンネイチャーという扱っ た事がないテーマだった。さらに、「都市の中における水の価値」から 「人々の生活と水との関係性」で幅広くスケールを行き来した。1 つの 提案に対してここまで多くのスケールに向き合ったのは初だった。また、 バックグラウンドの異なるメンバーによって分野を超えた議論が生まれ た。視野が広がる、スタジオの醍醐味を存分に味わえたと思う。

# 飛び込んだもの勝ち

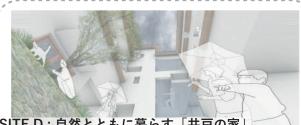
社会基盤学専攻 河川研究室 齋藤悠宇

ポスターにあった「他専攻からも参加可能」の文字を信じて半ば向こう みずに参加したが、年末の 2ヶ月をこの演習にかけて結果的にとても よかった。昨年度のマスタープランを設計の視点から作り直すという普 段とは逆のベクトルのプロセスが新鮮で、また都市工の皆に囲まれなが ら自分史上一番に設計を細かく図面にできたのはいい経験になった。他 専攻でも都市スケールの設計に興味がある人にはおすすめします。



SITE B:農により新たな交流が生まれるキャンパス

現在進行形で建設が進む東京国際大学キャンパスの代替案の提案。 SITE A とつながる基壇部分は集めた雨水を使う水田や畑が展開し、 大学生や公園利用者などの農を介した交流が生まれる場となる。



# SITE D: 自然とともに暮らす「井戸の家」

斜面上の狭小住宅地への提案。公園からオープンスペースをひだ状に 引き込み、雨水を集める「井戸の家」を地形に沿って配置していくこ とで、ゆとりのある自然あふれる住環境とコミュニティを提案する。



# SITE E-2: 流域の水を受け止める「タナダリビング」

公園で貯めた水を下流部の水窪水路に流していく際に、その高低差を 生かした「タナダリビング」を提案する。周辺住民の水耕栽培や憩い の空間となり、コミュニティのための豊かな屋外空間となる。

# スケール横断的なデザインの密度

講評 都市デザイン研究室 宮城俊作教授

今年度の大学院都市デザインスタジオ・ThemeCでは、同じ対象エリア と課題を踏襲しつつ、前年度の提案に対するAlternativeもしくはCounter Proposal となるようなアウトプットを求めた。今年度、5名のメンバーが 分担してとりくんだ個々のゾーンの提案は、都心の人工的な環境の中に 再構築される水系に沿ったストーリーとシークエンスを創出した一連の リレーデザインとしては、前年度の成果を発展させたものであるが、特 に次の二点においてさらなる評価に値する。一点目は、それぞれのゾー ンにおけるデザインの密度が高いということ。これは、単にスケールを 上げてデザインが検討されているというだけにとどまらず、それぞれの ゾーンに固有の空間構造や環境構造にまで踏み込んでいること、またそ の妥当性はともかく、技術的な提案がなされていることを意味する。二 点目は、ゾーン間の移行帯に相当する部分における検討が繰り返されて いること。これは、ゾーン間で発生する矛盾を解消するための相互調整 がなされていることにとどまらず、その過程が各ゾーンにフィードバッ クされ、それぞれの提案内容を進化させていることを意味する。言い換 えれば、個々のゾーンを超えたスケール横断的な試行錯誤を反復するこ とによって、デザインの密度が高まっていったことになるであろう。

# 一文字に込める新年の抱負 -新しい生活様式の中で-

日本の伝統行事である書き初め。今年1年をどのような年にするか、年初め に心を落ち着けて考え、一筆にその想いを込める。昨年も行われたこの企画 であったが、なかなか研究室に集まりにくい現状を受けて、本年は各々が離 れた場所から、各々ができるやり方で、新年の抱負を漢字一文字で表現して もらった。その一文字に込められた想いに加え、どんなツールでそれを表現 したのかまで想像して、ご覧ください。



宫城俊作先生



中島直人先生



**永野真義**先生































# INFOMATION

# BOOK OF THE MONTH



私と 日本建築

A. レーモンド著 , 三沢浩訳 SD 選書 1967

> 推薦者 D2 深谷

『現代建築の目的は、足を大地に再び下ろし、植えつけることである。自然を旨として、内面から働きかけ、外面の、芸術的、抽象的な影響を捨てさることである。そしてもう一度マスタービルダー(巨匠)を意味する建築家に生まれかわることである。』 御意

# WEB MAGAZINE

続きは都市デザイン研究室 HP で! https://ud.y.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/





三国 PJ では地元住民の方々を招き、 三国をフィールドとして活動を行う 4 大学がオンラインで成果報告を行いました。提案に対して様々な意見 をもらうことができ、とても有意義 な会でした。(M1 野上)



修論審査会

今年はコロナ禍ということもあり、オンラインでの開催となりましたが大きな混乱もなく、修士2年26名(うち、デザ研9名)が発表を行いました。ジュリーや修士研究に対する思いを綴りました。(M2 佐鳥)

LOOKING BACK AT JANUARY

8th 三国 PJ

研究発表交流会 **20th** 宇治 PJ

3 大学合同 MTG **25-26th** 修論審査

# POSTSCRIPT

自己研鑽に励み、新たな都市 像を提示する。一歩、そして また一歩。小さな歩みを着実 に踏み締める。仲間と共にい かに歩んでいくか。地域の未 来に寄り添うことができる か。その足音がいつか誰か ためになるように。(M1 鈴木)

発行日: 2021 年 1 月 31 日